

## 思はぬ方・思はぬ山

### ——贈答歌について——

宮廷文化の栄えた王朝時代の歌の主流は、贈答歌にあった。この贈答歌（物語中のそれを含めて）の中に、「思はぬ方」「思はぬ山」という言葉がしばしば現われてくる。

当時の贈答歌の特徴は、叙景歌の装いをこらした抒情歌というところにあると思われる。たとえば表向には、「未摘花の色に出でにけり」「招く尾花の穂に出でる」等のように自然現象に關しての叙景を装いつつ、その裏、裏側で真に意味するところは、「思いが外に出てしまった」「とうとう口に出して言ってしまった」といった抒情に關する事である。直截に口に出すことは露骨にすぎることを、而も最も露骨なことから遠い、何気ない叙景歌の形をかりて表現するところに、贈答歌の面目があるからである。従って当然の事として、表と裏の二重の意味を帯びた言葉遣いが発達することになったが、此処で問題としてとりあげる「思はぬ方」「思はぬ山」はその一例である。表向きは、烟や風の靡く方向に關する「思はぬ方」（違った別の方向）という叙景的表現をかりながら、実は裏では、贈答の対象である相手とは違った「思はぬ方」（別の

思はぬ方・思はぬ山

## 中 井 和 子

男・女」を意味し、さらには「思はぬ山」も同様である。

従来の註釈書の解釈でも、それぞれの歌に關しては、「思はぬ方」「思はぬ山」の裏の意味に触れていないわけではない。たとえば「思はぬ方」を「スカナイ嫌ナ方」とし、あるいは「思はぬ山」を「他ノ男」と解して、全くの叙景的解釈に終っている場合はむしろ少いといえる。しかし問題は、これらの言葉の、右にふれた如き二重性を二重性のままに受取るかどうかにある。歌全体からみて結局は、裏の意味がそのまま歌の意味になる、というのでは、贈答歌としての歌の意味は死んでしまうほかない。

二重性とは此の場合、一つの言葉がそのまま表と裏の二重の意味を帯びるということである。だから、「思はぬ方・山」は、言葉の機能の上からいうならば、掛け言葉に對應するものとして、意味上の乃至内容上の掛け言葉として使われているといえよう。

ところが「思はぬ山」に關しては、問題はさらに複雑である。というのは、叙景と抒情という關係のもとでの抒情の内容が、さらに新しい二

重性を帯びることになるからである。詳しくは後で触れるように、「思はぬ山」という言葉は、抒情の内容として、改めて表向き「極楽浄土を目指した仏道修行のための出家」という意味を帯び、従って元来の叙景と抒情という二重性の上に、さらに「出家」対「別の男・女」という対極的な意味をもった内容上の二重性が、複合的に組み合わさるのである。そして「思はぬ山」が意味上の二重性を附加すると同時に、「思はぬ方」も亦同様の新しい意味を帯びることになった。

さらに又「思はぬ方・山」は、「極楽浄土を目指した出家」の意を基にして、それとは正反対の「地獄」並びに「浮世」という両様の意味に転じることがある。「思はぬ方・山」の「極楽浄土」という面に対しては「地獄」の意が、そして「仏道修行のための出家」という面に対しては「愛慾の現世・浮世」の意が転生するのである。こうして「思はぬ方・山」の二重性は、いよいよ複雑な形に複合されてゆくことになり、そうなることで「思はぬ方・山」は、贈答歌にとって愈々利用度を高めてゆくのである。一々の場合については後に触れる通りであるが、その複雑さは現在の我々にとってはもはや不分明になりかかっているものの、時の人達にとっては共通の約束事として自在に流通するものであったと思われるのである。

これらの「思はぬ方」「思はぬ山」の、贈答歌中の用例は、八六八年を生年とする貫之の歌を端初として、そのあとには、齊宮女御、実方、景明……大貳三位と、ほぼ同時代の人々の作がつづく。その中、貫之の歌は、「古今六帖」のものであって、真実性がやや曖昧と考えられるので、実際にはその用例の殆んどは、九五〇年から一〇五〇年にかけての

凡そ百年の間、すなわち、村上帝から後一条帝にかけての時代にかたまるものと考えられる。この時代は、いわゆる摂関政治が、もっとも華やかにその姿をあらわす時期であり、藤原氏女子の入内した後宮を中心に、宮廷男女の社交生活が華々しく展開された時である。

「思はぬ方」「思はぬ山」はこの地盤の上に、二重あるいは四重に、幾重もの意味を展開し、やがて、摂関政治の衰退によって、宮廷サロンが色あせるとともに、姿を消すのである。<sup>注1</sup>

以下、「思はぬ方」並びに「思はぬ山」を使った贈答歌を介して、これらの言葉の二重性の由来、経過、そしてその種々相をたどることにする。

### 一、「思はぬ方」の由来

古今集恋四に、「題しらず 読人しらず」として次の歌がある。

須磨の蜃の塩やく烟風をいたみ思はぬ方に棚引きにけり<sup>注2</sup>

この歌は、伊勢物語一一二段にもあり、そこには次の詞がきがついている。

「むかしおとこねんごろにちぎりける女のことざまになりければ」

この詞がきを読めば、この歌が単なる敍景歌でないことは明らかである。もっとも古今集の序文の古注にも、已にそのような解釈があらわれているようである。すなわち古今集の序の「よつはたとへうた。わが恋はよむともつきじありそうみ浜の真砂はよみつくと」の古注に「それはよろづの草木鳥けだものにつけて心をみする也。このうたはかくれたる所なむなき。されどはじめのそへうたと同じやうなればすこしさま

をかへたるなるべし。すまの蟹の塩やく烟風をいたみ思はぬ方に棚引きにけり。このうたなどかなふべからん」とある。この古注によれば、「たとへ歌」とは「よろづの草木鳥けだもの」を借りて、「心をみする歌」とある。とすれば、「須磨の蟹の……」の文字は、恋人の心変りという心をみするためのものにすぎず、結局のところその敘景は比喩の意味しかもたないという事になる。そのことは、伊勢物語の詞がきの「ねんごろにいひちぎりける云々」と照応する如くである。

ところが、この歌を全くの「たとへ歌」として解釈するには、恋人の心変りを烟のなびくなびき方で表現するという約束事が、少くとも当時の歌壇において已に約束事として成立っていたという背景がまづ考えられなければならない。たとえば古今集の序の古注に「かくれたる所なむなき」といわれた「わが恋は……」の歌の「たとへ」ならば、約束事としてでなくとも、誰にでも通用するであらう。「浜の真砂」は、よみつくせないものの代表として、誰にでもそのまま通用するからである。しかし、烟がよそに靡くことをたとえとして、恋人の心変りを汲みとることは、そのままでは難かしいのである。そのたとえをたとえたらしめる約束事は、どのようにして成立したのであらうか。

万葉集に次のような歌がある。

1246 しかの浦の塩やく烟風をいたみ立ちは昇らず山に棚引く<sup>注3</sup>

結句の相違は大きいであらうが、この歌は古今集の歌によく似ている。古今六帖では、この歌の初句を「須磨の」としており、古今集の歌は初句を、「伊勢の」としている。どの注釈書でも、この万葉集の歌を単純な敘景歌と解しているが、それにひきかえ、古今集の場合は、古注にお

いてさえ已に敘景を消し去り「たとへ歌」としている。万葉集の歌も、目前の風景に心情を托した歌と考えられないでもなからうし、反対に、古今集の歌も、単なる敘景歌と解せられないでもなからう。にもかかわらず、一方は単純な敘景歌と解せられ、他方は、早くも古注において「たとへ歌」と解せられているのである。

もともとこれらの歌は、相関連しているのではあるまいか。志賀、須磨、伊勢といった海岸名の変化、作者不明、成立事情不明の歌であること等は、この歌が民謡的な成立をもち、口から口への伝誦の間に移動したという感じをおこさしめる。海岸名の変化は、この歌の歩いた経路を示していよう。そして伝誦の間に、この歌は、その敘景の背後に恋人の心変りを暗示するようになったといえよう。結句の変化が、その事を示しているのである。

「思はぬ方」という表現は、家持集にある。

秋霧のまぎれに家路忘れてや思はぬ方に宿りをぞする

この歌の「思はぬ方」は、已に早くも「別の女」という裏の意を伴っていると思われる。

万葉集の歌の結句が、「思はぬ方に棚引きにけり」と変った時、「恋人の心変り」という裏の意味はより表に押出されることになった。やがて「題しらず よみ人しらず」として古今集に、「むかしおとこ……」の詞がきを伴って伊勢物語に、集録される。しかし「須磨の蟹の……」の歌は、この時はまだ背負ってきた民謡的背景を依然としてもちつづけていたと思われる。古今集の「須磨の……」の歌の解釈には、例えば宣長の遠鏡のように「スマノ浦ノアマノ塩ヤク烟ガ風ノツヨサニワキノ方

ヘナビイテユクヤウニ、ワシガ思フ人モ思ヒモヨラヌ人ノ方ヘナビイテイクワイノ」と、叙景を生かして解釈しているもの、岩波の古典文学大系の注のように、「風がはげしく吹くので、私の思いがけない方面に塩やく烟が靡いてしまったことよ。風を男の誘惑に、烟を女の心に譬えた」のように、叙景をかりのものと解釈しているものとの、二つの系統があるが、古今集や伊勢物語集録の当時は、この歌には、まだ民謡的背景が生きていた事を考えるなら、前者の叙景を生かした解釈の方が適切かと思われる。大体江戸時代の注は前者の宣長の系統をひき、現代のものは、後者に属するようである。

#### 躬恒集に

藻塩やく蟹の焚く火の烟こそ思はぬ方に立ちのぼるらし

の歌がある。この歌は、古今集の「須磨の蟹の……」の歌のいいかえではあるが、この歌には、古今集の歌のもっていた民謡的背景は已に消えており、「思はぬ方」のもつ二重の意味〔叙景〕+〔抒情〕別（男・女）に作歌の興味は移っている。しかし「思はぬ方」が、その二重性を十分に發揮するには、贈答歌という特殊形体の成立をまたなければならぬ。贈答歌中に採用されることによって、「思はぬ方」は、表裏二重の意味を十分に發揮するのである。しかも贈答歌形体への採用の先鞭をつけるのは、「思はぬ方」ではなくて、同様の二重の意味をもつ「思はぬ山」であると思われる。

#### 二、「思はぬ山」〔叙景〕+〔抒情〕別（男・女）

大和物語一四一段の歌に<sup>注4</sup>

花すすき君が方にぞなびくめる思はぬ山の風は吹けども  
とある。

男は女を残して旅に出た。男の留守が余りに長かったので、本来浮気であった女は、その淋しさに堪えかねて、女を誘う別の男に逢った。この別の男と女との噂が、旅をしている、もとの男の耳に入った。そこで、もとの男は女に「その人と我といづれをか思ふ」と問いかけた。その時の女の返歌である。

女は、もとの男の問いに対して、「君が方にぞなびくめる」と答え、さらにつづけて「思はぬ山の風は吹けども」といった。この「思はぬ山」は、歌の表側では花すすきに吹きつける「思はぬ山」の風として、叙景をよそおっているが、その裏側では自らを誘う「思はぬ山」〔別の男〕を意味しており、「思はぬ方」同様二重の意味〔叙景〕+〔抒情〕別（男・女）を与えられている。

大和物語の、この「思はぬ山」は、「思はぬ方」から派生したものと考えられるが、さきの躬恒の「思はぬ方」の歌に比べると、その用法は遙かに自由である。躬恒の歌の「思はぬ方」は、二重の意味に用いられているとはいえ、それは古今集の歌の言葉を使った本歌取りの遊びにすぎない。しかし、この大和物語の歌では、「思はぬ山」の二重性は、明らかに相手に対する返事として用いられている。作者は、表向きは、花すすきに吹きつける「思はぬ山」の風という叙景で答えながら、その裏、裏側では、「思はぬ山」の語で「別の男」を表現しているので、花すすき〔女〕は君が方にぞ靡いています、思はぬ山〔別の男〕の風は吹いておりますが——「別の男」の誘いもあります——という事になる。そ

してそれは、あなたが余りに私につれなくなると、「思はぬ山」〔別の男〕にだって靡いてしまうかもしれませんよ、というおどしともなるのである。そして、一旦、かように相手にむかつてのおどしとして用いられた「思はぬ山」は、贈答歌に用いられて、相手に対するさまざまな訴えかけをあらわす言葉となるのである。

ところで、花すすきと風については、例えば、次のような歌がある。古今六帖にのる深養父の歌として

花すすき風に靡きて乱るるは結びおきてし露やとくらん

この歌では、花すすきは、吹く風に靡いて心変りする浮気なものとしてとらえられている。そんな花すすきも、時として風に背くことがある。同じ六帖の伊勢の歌では

いかばかり風のつらさに花すすき吹きくる風をまづそむくらん

とある。花すすきは、風に靡き乱れる浮気な存在であるが、時としては、風に背を向ける事がある。花すすきは、「思はぬ山」〔別の男・女〕の風には背をむけて、「君が方にぞ靡いて」いるのだが、元来が風に靡き易い花すすきは、相手が余りにつれなくあれば、「思はぬ山」〔別の男・女〕にでも、靡くかもしれないのである。

この場合、「思はぬ山」が「山」であって、例えば「思はぬ川」と熟合しなかったのは、川にはすでに「思ひ川」という別の歌言葉があったせいかもしれない。

その他の、贈答歌中に用いられた「思はぬ山」の例として、次の歌がある。

。雲・霞と「思はぬ山」

思はぬ方・思はぬ山

雲や霞は本来山にかかるものである。

白雲の行くべき山はさだまらずおもふ方にも風はよせなむ

(後撰集恋六)

の場合、白雲はかかるべき山をさだめかねて漂っているのである。風よ、私の思う方へ連れて行っておくれと。そのような雲や霞が、かかるべき山を見失った時、かかるべきではない「思はぬ山」にさえかかるかもしれない。雲や霞は、「思はぬ山」には背をむけて、思う山を求めるのだが、思う山が見失われた時、本来山にかかるべく定められている霞や雲は「思はぬ山」〔別の男・女〕であるにもかかわらず、かかってしまいかもしれない。左の例は、そのような歌である。

① 同じをりに

いかでなほ春日霞になりにしが思はぬ山にかかるわざせじ

② 又ことをりに

わびぬれば身を浮雲になしつも思はぬ山にかからずもがな

(以上、齊宮集)

③ もろともにほかへゆかんとひ契りてふとひとりいぬるにのみてやる

行く春に立ちおくれぬと春霞思はぬ山を嘆きつるかな

(源 重之集)

①②は、ともに齊宮女御の作である。「春日霞になりにしが」「身を浮雲になしつも」とは、霞となり雲となった思いが、かかるべき山を見失って空に漂うのである。②の初句「わびぬれば」は、特にそれを物語っている。

齊宮女御は、村上帝の懇望をうけて入内されたが、安子、芳子の勢力に圧されてその後宮生活はわびしいものであったと伝えられている。だから女御の思ひは、浮雲となり、霞となって、かかるべき山を求めながら、(帝寵を失い)かかるべき山はないのである。そこで、「思はぬ山にかからずもがな」「思はぬ山にかかるわざせじ」という述懐が生れる。しかしこの歌は、一見したところ述懐の歌のようにみえるが、実は帝にあてた贈答歌である。①の詞がき「同じをりに」の「同じ」は、前の歌の詞がき「いかなる折にかありけむ御硯に入れ給ひにたりける」をうける。いつかは帝のお目にとまる事を意識して作られた歌であり、帝に向けられた恨みの歌である。女御は、かかるべき山を見失った悲しみを、「思はぬ山にかかるわざせじ」という反語的表現で相手に訴えたのである。我が思ひは、雲となり、霞となって空に上っている。それでも、「思はぬ山」「別の男」にだけは、かかりたくはない、かかるまいと思う。あなたさえつれなくなればこんな思ひはしなくてすむのに、あなたが余りにつれないと、かかりたくもない「思はぬ山」「別の男」に……である。

③も、①②と同様の意味の歌であるが、恨みよりも、おどしの要素の方が強い。春に置いてきぼりにされた春霞は、かかりたくもない「思はぬ山」を嘆いております。あなたが余りにすぎなくなさると、私は「思はぬ山」「別の女」にかかりますよ。こういって相手の無情を恨むとともに、相手をおどすのである。

- ④ 紅葉見に入る「思はぬ山」・月影の入る「思はぬ山」  
紅葉見に君におくれてひねもすに思はぬ山を思ひつるかな 貫之

(古今六帖)

#### ⑤ 花山院の歌合せに

月影は宿にしとまるものならば思はぬ山は思はざらまし (実方集)

④は、女と紅葉見に山に入る事を約束したのに、女は男をだし抜いたのであらうか。あなたのつれない仕打にあつて、ひねもす、「思はぬ山」の紅葉を思ったことです。そんな無情なことをなさると、つい紅葉見に「思はぬ山」「別の女」に行きますよ。

⑤は、月影が我が宿にだけ訪れるものならば、「思はぬ山」「別の女」のことなど思わないですむのに。あなたは私のことを責めるが、私が「思はぬ山」を思ったりするとすれば、あなたが方々の山を照し移るのでそれに誘われての事です。

さらにもう一つ、「思はぬ山」の変った用例として次の歌がある。

- ⑥ めのとの弓の袋とり出でて果物を取り入れておこせたりければ

藤原実方朝臣

おし張りて弓の袋としるしるや思はぬ山の物をいるらむ

(新拾遺集)

弓を入れるのが弓袋本来の役目である。めのとは、その弓袋に果物を入れてよこしたので、弓を入れる弓袋と知っていて、弓とは違う「思はぬ山」「別の山」のもの(果物)を入れてきたのか、こういって、恐らくは多情な性癖のめのとをからかったのである。弓袋を、「思はぬ山」と組合せたのは、弓が山形で山を暗示するからであらうか。又、弓は男性を暗示するともいわれている。そして、この時の果物は、「思はぬ山」のものであるから、山に産する栗の類いであらう。この歌の場合、裏側にも贈答歌おきまりの男女の意味は直接にはなく、単なる言葉

のしやれを弄んだだけのものであるが、それだけに「思はぬ山」という言葉が、当時の宮廷社会の人々の日常にとけこんでいたことがわかると思われる。

### 三、贈答歌の「思はぬ方」

次に述べるのは、贈答歌中に用いられた「思はぬ方」の例である。

これらの歌作者たち、源景明以下、長能、赤染衛門等は、さきにあげた、貫之、齐宮女御等の「思はぬ山」の歌作者たちとほぼ同じ世代にあるとはいえ、それらの人々に較べてやや年代が下るので、贈答歌への採用は、「思はぬ方」の方が寧ろ、「思はぬ山」より後の事と考えられるのである。すなわち、「思はぬ山」は、「思はぬ方」から派生したものでありながら、贈答歌への利用度の点で、もとの語をしのぐ故に、いはやく贈答歌に採用され、そして一旦「思はぬ山」の語が使われ始めると、今度は逆に、そのような特殊な用法が、「思はぬ方」にも影響を与え、「思はぬ方」も亦、贈答歌において、そのような特殊な意味に用いられるようになったと思われるのである。

拾遺集に、源景明の歌として

女のもとにまかりけるをもとの女のせいし侍りければ

風をいたみ思はぬ方にとまりする蟹の小舟もかくや侘ぶらん  
という歌がある。

男は女の許に行くのを、もとの女に制止され、出かける事が出来なくなってしまうのである。そこで、男は、あの古今集の歌に詠まれた女も、心ならずも「思はぬ方」〔別の男〕にとまりして、今の自分と同じ

思はぬ方・思はぬ山

ように侘しい思いであつたろうと思います。私も、心ならずも「思はぬ方」〔別の女Ⅱもとの女〕にひきとめられてあなたのもとに行けず、侘しい思いをしています。私のこの侘しさを察して下さい、と相手の女に不参のいいわけをしたのである。

「風をいたみ思はぬ方にとまりする蟹の小舟」という表現は、古今集の「須磨の蟹の塩焼く烟風をいたみ思はぬ方に棚引きにけり」の歌からきている。しかし古今集の歌の場合には、「思はぬ方」は、作者である男からみての相手の女の棚引く方同〔別の男〕であつたが、この景明の歌では、それを歌中の女の気持になって受とっている。ここでは、女は男において「思はぬ方」〔別の男〕に心変りをしたのではなくて、「風をいたみ」それで心ならずも「思はぬ方」〔別の男〕にとまりする事になったと受取っているのである。そしてそれを、もとの女に制せられて、心ならずも「思はぬ方」〔別の女Ⅱもとの女〕にとまりする作者自身の現在の侘しい気持と結びつけるのである。

八代集抄の注では、この歌の本歌として、古今集の歌を考えていない。単に、「風をいたみ」思イガケヌ所にとまりした蟹の小舟に、現在の作者自身の心境を托した歌と解している。それでも一応の解釈は成立つと思われるが、それでは「かくや」の内容も不明であり、従つて詞がきとの関連も曖昧と思われる。この歌の面白さは、古今集の歌の「思はぬ方」を、歌中の女が心ならずもとまりした、「思はぬ方」〔別の男〕と受とつて、その女の気持をかりて、作者の不参のいいわけをしたところにある。作者が相手の女の許に行く事が出来ないのは、歌の中の女同様、心ならずも「思はぬ方」〔別の女Ⅱもとの女〕にとまりする事を余

儀なくせられた為であるので、相手への不参のいいわけが成立つのである。古今集の歌を本歌とした歌ではあるが、その中の「思はぬ方」を、二重〔叙景〕＋〔抒情〕（或は三重〔叙景〕＋〔別の男〕↓〔別の女〕もとの女）の意味に使う事によって、相手に対するいいわけをしているのである。

その他の、贈答歌中の「思はぬ方」の例として、

- ① しのものしのもとにまかりて物いはむといひ侍りしに暇なしとて出で侍らざりしかば

烟だに少したなびけ朝なけに灘の塩やき暇なくとも

かへし

灘の浦にたえぬ烟はたえぬとも思はぬ方にみともせもせし

（以上、長能集）

- ② 赤染衛門うらむる事侍りけるころつかはしける 右衛門督朝任

渡の原たつ白波のいかなれば名残久しくみゆるなるらむ

かへし

風はただ思はぬ方に吹きしかどわたの原たつ波はなかりき

（以上、後拾遺集）

- ③ ちらさじと思ひし草子をかくも有りけりと見せに人のおこせたりし

さもやと覚ゆる人の手にてありしかば

いかがせむなだの塩やき風を早み思はぬ方になびく烟を

（大貳三位集）

①は、男が女に「烟だに少したなびけ」と誘ったのである。それに対して女は、私にはなびく烟など絶えてありません、それに、たとえ烟が

絶えないでいたとしても「思はぬ方」〔別の男、すなわちあなた〕などには靡きたくありません。こういつて男の誘いを拒否したのである。手ひどい肘鉄の歌ではあるが、「思はぬ方」に烟が棚引く、棚引かぬと、表向きは叙景で表現される事によって、その肘鉄の態度は柔げられている。

②は、男（朝任）が、女（赤染衛門）をおいて、別の女「思はぬ方」に行き、それで女が恨んでいた頃、男はどんな白波がたって、いつまでも波の名残がしずまらないのでしょうか、と空とぼけて言いかけたのである。そこで女は、「わたの原たつ波はなかりき」〔別に波など立ってはおりません〕、もっとも風は、「思はぬ方」に吹いていたようですけれども、といった。風は相手の男であり、「思はぬ方」は、その風の吹く方〔別の女〕である。風が「思はぬ方」〔別の女〕に吹けばこそ、波は立ち、女は恨むのであるが、男の空とぼけが憎いので、波など立ってはおりませんよ、もっとも風は「思はぬ方」〔別の女〕に吹いていたようですけれども、女は言ったのである。

③は、女の大切にしていた草子が何時の間にか紛失し、自分の男といわくありげと思われる女の許から、「かくも有りけり」と送って寄越された。そこで女は、烟〔男〕は、推察通り「思はぬ方」〔別の女〕に靡いていた、とさとする。

「思はぬ方」は、古今集の「須磨の蟹の…」の歌を本歌としているので、これを用いた贈答歌にも、本歌のもっている叙景を残しているものが多い。①の歌には、灘の浦という海岸名、烟の文字があり、②③の歌には、風、塩、烟の文字がみえる。何れも本歌にあった叙景の道具立て



である。また海岸に縁のある波、吹く等の文字も多い。

これらの歌(①②③)では、「思はぬ方」は贈答する相手の靡く方向として、とらえられている。相手にむかって、あなたは「思はぬ方」〔別の男・女〕に靡いたと恨みかける用法である。この事も、本歌の「思はぬ方」の用法が、相手の靡く方向としてとらえられている事に由来すると思われる。①の長能集の歌の「思はぬ方」は、相手ではなく自分の靡く方としてとらえられているが、それは、相手からの言いかけの返しであるからである。言いかけの歌に「烟だに少し(思はぬ方に) 棚引け」〔相手の女の靡く方向〕とあるのをうけて、自分は、そんな「思はぬ方」にみともせもせじ」といったのである。<sup>註</sup>又、源景明の歌のように、自分の不参のいいわけに「思はぬ方」を持出す例もあるけれども、あれは、本歌をわざとそのように採用したのである。

「思はぬ方」の用法が、相手の靡く方向をさして用いられる事をよく示す例として、次の源氏物語の歌は適切かと思われる。ここでは、本歌の叙景の道具立て、塩、烟等の風物は已に消えているが、「思はぬ方」は、相手の靡く方向として用いられている。

。漚漂の巻の、宣旨の女の歌

うちつけの別れを惜しむかごとにて思はぬ方に慕ひやはせぬ

これは、光源氏の次の歌と詞のかえしとしてあるものである。

「かねてより隔てぬ仲とならねど別れは惜しきものにぞありける慕ひやせまし」

宣旨の女は、光源氏と明石の上の間に生れた姫君の乳人に撰ばれ、明石の地に下ろうとしている。その時、光源氏は宣旨の女に、「あなたと

思はぬ方・思はぬ山

は今まで馴れ親しんできた仲ではないけれども、こうしてお目にかかれて今別れるのはつらい、一その事あなたについて行こうかしら」と言いかけた。それに対して宣旨の女は、「急にいかにも私と別れるのが惜しいようにおっしゃるのは、すべてかこつけ事であって、本当は「思はぬ方」〔別の女〕をお慕いなのでしょう」と返したのである。「思はぬ方」とは、この場合、宣旨の女の贈答する相手である光源氏の靡く方向〔別の女〕であって、具体的には、明石の上の事である。明石の上は、贈答する相手(光源氏)の靡く方向として、宣旨の女にとっての「思はぬ方」であるから、「思はぬ方」としてとらえられたのである。

明石の上を、「思はぬ方」とする解釈には異論があるかもしれない。事実、この「思はぬ方」は、河内本及び青表紙中の「横本・平本」にある本文であって、青表紙本中のその他の本文には、「思はむ方」とある。又、対校源氏物語と国歌大観だけが、本文として、この「思はぬ方」を採用しているが、その対校源氏でさえ、解釈の方は「思はむ方」に従っており、他の註釈書はすべて「思はむ方」を採用している。

明石の上は、なる程光源氏の「思はむ方」の一人であって、「思はぬ方」ではない。しかし、この歌は、宣旨の女と光源氏との間に交わされているのであり、「思はぬ方」は、贈答するこの二人の間の言葉なのである。宣旨の女が、明石の上を、相手の光源氏の靡く方向として、「思はぬ方」〔別の女〕ととらえるのに何等不都合はないと思われる。「思はむ方」を本文とした場合、「思はむ方」を慕うのは当然の事であり、それならば、「かごと」とか「慕ひやはせぬ」という反語的表現は不必要という事になる。

#### 四、二重性の変形〔叙景〕＋〔抒情〕△別の男・

##### 女＋出家▽

当時は「山に入る」といえば、出家や仏道修行のための長精進を意味したので、「思はぬ山」には、「別の男・女」という裏の意の外に、更にもう一つ「出家」の意味が加わる事になった。ここに至ると、「思はぬ山」は、表側〔叙景〕と裏側〔抒情〕別の男・女」という表裏の二重性をもつのとどまらないで、その裏の抒情にさらに〔出家〕＋〔別の男・女〕という二重の意味が与えられ、四重の意味をもつことになるのである。〔別の男・女〕を意味した「思はぬ山」が、一見正反対の「出家」の意をもつのは、恋愛や出家に対する当時の特殊な傾向が反映していると思われる。

当時の貴族にとっては、恋は遊びであった。そして、その遊戯的な恋に破れて入る「思はぬ山」「出家」も亦、いわば遊びの出家であった。ここでは出家は、相手の気をひき相手をひきとめる手段にすぎないので、「思はぬ山」「出家」は、「思はぬ山」「別の男・女」と結びつくのである。「思はぬ山」〔叙景〕という言葉の裏側で、「出家」と〔別の男・女〕という一見両極のものが結びつくのはその為である。しかし一方、「思はぬ山」が、「出家」を意味し得たのは、当時の貴族にとって仏教が身近なものであった証拠にもなる。この時代を彩る様々の宗教行事―加持・祈禱・法華八講・精進・受戒・初瀬詣等々――はそれらを物語ると思われる。

次に示すのは、そのような四重の意味で用いられた「思はぬ山」の例

である。

#### ① 小式につかはしける

藤原朝忠朝臣

ときしもあれ花のさかりにつらければ思はぬ山に入りやしなまし<sup>注7</sup>

かへし

#### ② 我がために思はぬ山の音にのみ花さかりゆく春をうらみむ

(以上後撰集)

#### ③ 人に

君だにも我だに浅く成はてば思はぬ山に入りぬばかりぞ(元真集)

①は、女がつれなかったのであろう。折も折、人々が花見にうかれる花の季節に、あなたからつれない仕打をうけてつらいので、「思はぬ山」「出家」＋〔別の女〕に入ろうかと思えます。と男が女によりかけたのである。後撰集新抄は、この歌を注して、「我が君のつれなきにより花故にはあらで思いもかけぬ山に入んと思ふとなるべきか」とし、更につづけて「山に入といふは世を遁れて山に入ることあれば其心もありと横井ノ千秋翁いへりき」として、「思はぬ山」に〔出家〕の意を出している。しかし、「思はぬ山に入りやしなまし」は、相手がつれないので、「思はぬ山」「出家」に入るといっただけではなく、相手がつれないので、「思はぬ山」〔別の女〕に入る、の意もあると思われる。あなたがそんなにつれなくなると、私は「思はぬ山」「出家」に入りますよ、というのであるが更にその裏には、「思はぬ山」〔別の女〕に入ってしまったですよ、といっており、相手を二重におどしているのである。

この事は、②の返しの歌で一そう明瞭になると思われる。あなたは私のために「思はぬ山」「出家」にお入りになって、花をはなれてこの盛

りの春を音にのみおきになるのでしょうか、どうも疑わしい事です。  
（あなたがお入りになるのは、「思はぬ山」「出家」ではなくて、花の咲く「思はぬ山」「別の女」なのでしょう）。この二人の贈答は、「思はぬ山」を軸となされている。男の「思はぬ山」の裏の意は「出家」ではあるが、更にその裏に「別の女」を匂わせている。女は、男のいう「思はぬ山」「出家」を否定して、「思はぬ山」「別の女」であろうというのである。

③も同様である。「君だにも我だに浅くなりてば」そうしたら「思はぬ山」「出家」に入ってしまったですよ（「思はぬ山」「別の女」に入ってしまったですよ）といったのである。

さきに「思はぬ山」の例としてあげたもの（二、の大和物語・斉宮女御・重之等の歌）でも、その裏側の抒情には、已に（「出家」＋「別の男・女」という二重の意味が含まれているとも考えられる。例えば、斉宮女御の歌（二、の①②）における「思はぬ山」にかからずもがな」は、いくらあなたがつれなくとも「思はぬ山」「別の男」にだけはかかりたくはない、というだけではなく、「思はぬ山」「出家」にはかかりたくはない、という、今一つの意味も含んでいるとも考えられるのである。

しかしよく考えてみると、これらの「思はぬ山」がその裏に更に（「出家」の意味をもつに至る場合は、歌の表面に作者の主観が直接に顔を出した場合ではないかと思われるのである。例えば、大和物語の歌において、「思はぬ山」は、花すすきを招く風という叙景的表現の中に歌いこまれているので、作者の主観の顔を出す余地はなく、作者はあくまで花すすきという叙景に托してしか己れを表現していない。そこでは「思は

思はぬ方・思はぬ山

ぬ山」が（「出家」と結びつく余地はないと考えられる。その事は斉宮女御の歌でも同様であるが、女御の歌は大和物語のものに比べると、「……なりにしが」「……なしつつも」「……せじ」「……かな」という主観の直接体が顔を出しており、それだけもう一つの意味（「出家」が、かすかに匂うと考えられる。しかし、これらの歌では、「思はぬ山」は結局は叙景表現の中にあるので、未だ単なる表裏の二重性（「叙景」＋「抒情」）にとどまっている。ところが、右の朝忠と小武の贈答になると、「思はぬ山に入りやしなまし」「思はぬ山の音にのみ……春をうらみむ」と、作者の主観が直接顔を出している。この歌では、も早、「思はぬ山」は、（「叙景」＋「抒情」）の二重性の面白さとしてあるのではなく、抒情が更に二つの意味（「出家」＋「別の男・女」）をもつことの新たな二重性とその関心が移っている。そして、さき程の二、の用例中の後半の例、貫之・重之の歌（二、ノ③④）は、表裏の二重性と抒情の二重性の中間に位置するものといえよう。それらは、「思はぬ山を思ひつるかな」「思はぬ山は思はざらまし」と、何れも作者の主観を表面に出しつつも、なお、紅葉見に入る「思はぬ山」、月影の入る「思はぬ山」と、表側を叙景で装おう意図もみせているのである。

## 五、執念の歌・悔恨の歌

「思はぬ山」に（「出家」の意が加わると、「思はぬ方」にも（「出家」の意が加わることになる。そして、表裏の二重性よりも新たに加わった裏側の二重性（「出家」＋「別の男・女」）の方に作歌の興味は移行する。又さらに「思はぬ方」や「思はぬ山」には、（「出家」とは正反対の方向を

意味する「地獄」あるいは「愛慾のこの世」の意味が転生することになる。次に示すのは、そのような「思はぬ方・山」の種々の用例である。

(1) 「思はぬ方・山」〔出家〕+〔別の男・女〕

A、「思はぬ方・山」〔出家〕といって実は「思はぬ方・山」〔別の男・女〕に行く相手を恨む歌

- ① 少将高光頭おろしにひえの山にのぼる由申して出でけるをいつものならひに思ひて我いとふ故にやうらみてよみ侍りける

大納言師氏女

あはれとも思はぬ山に君しいらば麓の草の露とけぬべし

(続後撰集)

- ② 男をうらみてよめる

和泉式部

あしかれと思はぬ山の峯にだにおふなるものを人の嘆きは

(詞花集)

①は、出家するといって家を出た男の言葉を、女を本気にはせず、「思はぬ山」〔別の女〕に入った、と受取ったのである。「いつものならひに思ひて我いとふ故にや」という詞がきがそれを示している。私をあれとも思わずに、「思はぬ山」〔出家〕実は〔別の女〕にあなたが入っておしまいになれば、その「思はぬ山」〔別の女〕の麓の草の露は、私の思い(火)でとける事でしよう。

この少将高光は、王朝のこの時代にあつて眞実妻子を捨てて出家した人と伝えられる。そのような出家であっても、妻の目には「思はぬ山」〔別の女〕とうつつたのである。

②は表の意味は、二人の仲をあしかれと「思はぬ山」の峯にまで嘆木

が生える事だ、の意であるが、裏では、そのような嘆木が生えるのは、男が、「思はぬ山」〔別の女〕に入ったからだ、と男を恨んでいるのである。男は「思はぬ山」〔出家〕に入るといつて出たのだが、女はそうは受取らず、あなたのお入りになった「思はぬ山」〔別の女〕の峯にまで、私の心はあなたを追うています——私の心には嘆木が生い茂っているのです——といったのである。「生ふ」に「追ふ」、「嘆木」に「嘆き」をかけ、「嘆木が生ふ」⇨「嘆きが追ふ」といつているのである。

右二首は、「あはれとも思はぬ」「あしかれと思はぬ」といい、また「麓の草の露」「嘆木が生ふ」と叙景的表現を用いているが、その範囲内で解釈しては意味不明である。<sup>註</sup>これらの歌は、「思はぬ山」に、〔出家〕+〔別の男・女〕という二重の意味を受取ることによって、はじめよって、「出家」の意は已に明らかであり、②は、「山の峯」という表現でそれを暗示したと思われる。しかも、何れも男を恨む歌である。女は、男の「思はぬ山」が、「思はぬ山」〔出家〕ではなくて、「思はぬ山」〔別の女〕と受取れるからこそ、男をうらんでいるのである。

B、相手が「思はぬ方・山」〔別の男・女〕に行くので、自分は「思はぬ方・山」〔出家〕に行く。

。かげろふ日記の例

春の頃、兼家の態度が余りにつれないので作者は出家さえ考えて、長精進にこもうとする。傍らの者は、そんな作者の態度にはらはらし、「精進は秋ほどよりするこそ、いとかしかなれ」などといつて延引をはかる。そんな或日、呉竹が届く。これは昨年頼んだものであったが、

今頃になって届いたのである。出家を考える身が、今更呉竹などと思うが、贈り主は「行基菩薩は行末の人のためにこそみな庭木をうへたまひけれ」などというので、作者は「あはれにありしところとてみむ人もみよかし」と思つて、その呉竹を植えさせる。ところが、雨風の日がつづき、呉竹は傾いてしまった。その時の作者の歌として

③ なびくかな思はぬ方に呉竹のうきよのすゑはかくこそありけれ

「思はぬ方」の表側の意味は、目の前にある呉竹の傾いた方向〔叙景〕であるが、裏側ではその「思はぬ方」に二つの意味をこめてゐる。

裏側の「思はぬ方」の第一の意味は、相手の兼家の行く方向である。

呉竹の贈り主は本文には誰であるとは出ていないが、兼家と考えるべきかと思われ<sup>注9</sup>。「行基菩薩……」という、まことしやかな人を喚ぶたセ

リフも、如何にも兼家らしいものである。あの人（兼家）の贈つてくれた呉竹は「思はぬ方」に靡くかな、であり、それはいいかえると、あの人

人は「思はぬ方」（別の女）に靡くかな、である。呉竹は昨年頼んだものであったが、長精進に出ようとする今頃になって届いた。気をとりな

おして植えたところ、「思はぬ方」に傾いた。あの人はいつもこうだ。この呉竹のように、たまに訪れてくれても、長精進に出かける前であつ

たりする。そして結局は、「思はぬ方」（別の女）に靡くのである。「浮世の末はかくこそありけれ」というのは、兼家の行く方向は、私にでは

なく、結局は、「思はぬ方」（別の女）にあるのだ、というそういう感慨である。

この歌はさらにもう一つ裏の意味をもっている。それは自らの上の事である。作者は今、長精進に出ようとしている。果ては出家しようと思

思はぬ方・思はぬ山

っている。自分はとうとう「思はぬ方」（出家）に靡くかな、である。

自分の浮世の行末はこんな事であつたのだ。目の前に傾いている呉竹を通して、作者は、自分において「思はぬ方」（別の女）に通う兼家の姿をみている。これが第一の「思はぬ方」の意味である。がもう一方に、さらにそんな相手の仕打のために長精進にも出かけなければならぬ自己をみている。兼家がつれないので、自分はとうとう「思はぬ方」（出家）にさえ行こうと思うようになった。兼家が「思はぬ方」（別の女）にさえ行かなければ、こんな事は考えもしないのに。

相手と自己とに分離した「思はぬ方」は、結局は相関連しているのである。<sup>注11</sup>

(2) 「思はぬ方・山」（「地獄或は浮世」）＋「別の男・女」——「思ふ方

・山」（「極楽或は法の山」）＋「思ふ男・女」の逆方向として——

「思はぬ方・山」の転生。

「思はぬ方・山」（「出家」）の意を基にしてそれとは正反対の方向の（地獄）或は（浮世）の意が、「思はぬ方・山」に転生することになる。

「出家」を意味する「思はぬ方・山」という一つの言葉に、それとは全く逆の意味をもつ（地獄）或は（浮世）の意味が転生するのは、まこと

に奇怪なことではあるが、それは「思はぬ方・山」の意味した出家が、実は、「思はぬ方・山」（別の男・女）に行く相手の気を引くためにな

される出家であつた事に起因する。それは、穢土を厭うて浄土を願う真の出家とは逆の側にあり、むしろ、愛慾のこの浮世か地獄への道に照合

するのである。ここにおいて、「思ふ方・山」（「思ふ男・女」）＋「極楽或は法の山」対「思はぬ方・山」（「別の男・女」）＋「地獄或は浮世」とい

う図式が成立し、「思はぬ方・山」には「出家」とは逆の意味が転生することになるのである。

「思はぬ方・山」に、このような逆の意が生じたのは、そんな事をなさると「思はぬ方・山」〔「出家」或は〔別の男・女〕〕に行ってしまうですよ、と相手の気をひく、いわば遊びの出家、いつわりの出家に対しての反省が生じたせいかもしれない。〔出家〕を単に相手の気を引く手段と考える所では、かような逆の意味の転生する事もないと思われるからである。次に示すのは、そのような「思はぬ方・山」である。

A、相手が「思はぬ方・山」〔別の男・女〕に行く苦しみにたえかねて、自分は、「思はぬ方・山」〔地獄〕に行く。

。かげろふ日記の例

これは、作者が「心地よはくおぼ」えて兼家に遺書をつくる、その遺書中にかかれた歌である。

いと罪ふかき身にはべれば

④ 風だにも思はぬ方によせざれば此の世の事はかの世にもみむ

はべらざらむ世にさへ、うとうとしくもてなし給ふ人あらば、つらくなんおぼゆべき

私は、罪深い身ですので、地獄行きかもしれません。がもしも、「風だにも『思はぬ方』〔地獄〕によせざれば」(無事成仏出来て極楽に行けたら)、そうしたら「この世の事は」かの世からかえりみましょう、そう言ったのである。<sup>註12</sup>ここでは「思はぬ方」は死後行きたいと思う極楽浄土に対する言葉として用いられている。

ところが、「思はぬ方」には、さらにもう一つの意味がある。それは、

相手の兼家の行く方向である。あなたさえ「思はぬ方」〔別の女〕によせざれば、である。そうしたら、私は安心してこの世をかえりみましょう。というのである。第一の意味が、最初の詞がきにつづいているのに対し、この第二の意味は、後の詞がきにつづいている。すなわち、あなたが「思はぬ方」〔別の女〕によせざれば、私は安んじてあの世からこの世をかえりみる事が出来ます。そうではなくて、私の死後にさえ、うとうとしくもてなしなさる方があれば〔「思はぬ方」〔別の女〕〕にいらっしゃるのでしたら、「つらくなむおぼゆべき」とつづくのである。

「風だにも『思はぬ方』〔地獄〕によせざれば」(第一の意味)と作者はいうが、それは、相手が「思はぬ方」〔別の女〕によせざれば」という第二の意味によって、そうなのである。作者が「思はぬ方」〔地獄〕に行くかどうかは、実は、相手が「思はぬ方」〔別の女〕に寄せるかどうかにかかっている。それ故に、第一の意味よりも本当は第二の意味の方がまず最初にある、作者の気持なのであらうが、この作者はそうはいわない。「罪ふかき身に侍れば」、地獄行きかもしれないが、もし私が『思はぬ方』〔地獄〕によせざれば……」という反語的表現で相手をまじろかし、その後、「はべらざらん世にさへうとうとしくもてなし……」と詞をつづけて「思はぬ方」〔別の女〕に行く相手への恨みを、じっくり匂わす。しかし、さらによく考えてみると、兼家が「思はぬ方」〔別の女〕によせなかったなら、作者が「思はぬ方」〔地獄〕に行かぬどころではなく、作者は〔死ぬ〕事もなかったのである。相手が「思はぬ方」〔別の女〕に行けばこそ、相手が憎く、自分がつらく、死にたいと思ひ、死んだら、地獄行きだと思うのであるから。恐るべき執念が、見

事に一首の歌を作っているというべきであろう。

B、「思ふ方・山」〔思う男・女〕+〔極楽〕を願って、「思はぬ方・

山」〔別の男・女〕+〔浮世〕にまよう。

。源氏物語、夕霧の巻の例

夫柏木を失って後の女二宮のもとに、夕霧は足しげく通う。唯一人のたよりであった母の御息所も女二宮の身を案じて死んで行く。

この後の女二宮は、もう夕霧のものになる外はなかった。その時の女二宮の歌として

⑤ のぼりにし峯の煙に立ちまじり思はぬ方になびかずもがな

「のぼりにし峯の煙」とは、火葬の煙である。その火葬の煙に「立ちまじり」とは死ぬ事である。女二宮は、峯の火葬の煙に立ちまじってあの世に行きたい、そして「思はぬ方」〔浮世〕にはとどまりたくはない、といっているのである。この場合、「思はぬ方」は、「思ふ方」〔死後の極楽世界〕に対するもの、すなわち、このわずらわしい浮世の意であるが、さらにもう一つの意味を含んでいる。それは、峯のけぶりの彼方にいる「思ふ方」〔母や夫、柏木〕に対するもの、「思はぬ方」〔夕霧〕である。あの世には、なつかしい夫や母御息所がいる。峯の煙に立ちまじって、夫や母のもとに行きたい、そして「思はぬ方」〔夕霧〕には靡きたくはない、とそういっているのである。<sup>註13</sup>

C、「思ふ方・山」〔思う男・女〕+〔法の山〕を求めて、心ならず

も「思はぬ方・山」〔別の男・女〕+〔浮世〕にまよう。

。源氏物語、夢の浮橋の巻の例

失踪した浮舟は、横川の僧都のもとにいる事がわかり、そこで薫は浮

思はぬ方・思はぬ山

舟に文を贈る。その時の薫の歌として

⑥ 法の師と尋ねる道をしるべにて思はぬ山にふみまどふかな

法の師と、仏の道への道しるべをしるべとしながらも、自分は、法の山とは別の、「思はぬ山」にふみ迷ってしまった。「法の師と尋ねる道」の彼方には、自分の求めた「思ふ山」すなわち「法の山」がある筈であるのにそこに至る事が出来ず、自分は「思はぬ山」〔愛慾の浮世〕に踏み迷ってしまった、そう詠んだのである。

薫が道心あつく「法の山」を求める人である事は、宇治の物語の最初に描かれている。「思はぬ山」に踏み迷うとは、それにもかかわらず、「法の山」に行き得ないで、「思はぬ山」〔浮世の愛慾世界〕に踏み迷っている事をいったのであるが、さらにその裏に、もう一つの意味がある。薫にとって「思ふ山」は、姉の大君であった。大君は、「法の山」の彼方にいた人である。それにもかかわらず大君を失った薫は、大君とは別の「思はぬ山」〔浮舟〕に踏み迷っているのである。<sup>註14</sup> 浮舟は、「法の山」とは逆の人であり、そこには、匂宮、浮舟、薫をめぐる愛慾の三角関係の世界があった。

以上の用例(①)⑥には、いわゆる贈答歌の範圍をはみ出るものが多いと思われる。

一体贈答歌とは、お互如何に相手をうまくいくるめるかにその本領があると思われる。贈答歌の主題は恋である。ここでは、自分の恋心はまず疑われるのである。それを如何にうまく言いくるめて、自分への疑いを相手への疑いに転化せしめるかに、贈答歌の面白さがある。そして「叙景」と「抒情」、或はさらに、その裏の抒情面の二重性、という風に

幾重もの二重性をにない得る「思はぬ方・山」という言葉は、かようないいくるめ合いのために、何より必要な言葉であったのである。ところでの場合、贈答しあうお互どうしは、実はその裏の意味、「別の男・女」或は「出家」については、左程深刻にも真剣にも考えていないのである。それは、相手の気をひき、相手をやりこめる手段として使われている。あなたは「思はぬ方・山」に靡いた、と相手をやりこめ、そんな事をなさると、「思はぬ方・山」に入りますよ、と相手をおどすのである。かような恋は、宮廷サロンを彩る社交の恋、遊びの恋といつてよいかもしれない。が一方、そのような遊びの恋が可能なのは、お互が宮廷サロンという共通の地盤、気心のわかる地盤にいるという安心のせいでもある。相手をやりこめ、相手をおどしながらも、お互気心はしれているという安心があればこそ、そのような遊びの恋も可能であったと考えられる。

ところが、右(①)～(⑥)の歌になると、右のような事情は些か異なってくる。贈答の相手は、真実遠い別の場所に行こうとしているのである。二人の間の共通の地盤は、も早失われており、二人の間は断絶しているのである。ここでは否応なく、「思はぬ方・山」に靡く相手の行動が、深刻な真剣な事実として取上げられてくる。そこにはも早、社交の恋遊びの恋はない。そして、相手に対するやりこめは相手に対する恨みに変じ、おどしは執念に変化するのである。或は亦、見失ったものに対する悔恨がひたひたと押し寄せ、あてのない相手にむかって、ひとり嘆きと恨みをつぶやく事になる。

①②の歌において、男は何れも女において「思はぬ方」に行き、女の

傍らにはいない。女はひたすら自分を捨てた男を恨む。しかしここでは「麓の草の露とけぬべし」「おふなるものを人の心は」と、その恨めしさは、まだ相手にむかって投げかけられている。それが⑤⑥の歌になると、も早恨みは相手にむかうよりも、自分の中にこもっているのである。

⑤において、女二宮は夕霧に求婚されている。も早逃れるすべはない。しかしこの歌は決して夕霧に対する拒否の返歌としてあるのではない。もしも贈答する相手を求めるとすれば、それは夕霧ではなく亡くなった母御息所や夫柏木であると思われる。「思はぬ方」(夕霧)には靡きたくはない、「思ふ方」(母と柏木)に行きたい。あなた(母と柏木)さえ私をおいてあの世に行ってしまったなかつたら、こんなつらい目にある事もなかるうに、と母や夫に訴えているのである。しかし、その訴えかけは、「靡かずもがな」という自らの願望表現にとどまっている。死者(母と夫)のいる所は訴えかけるには余りにも遠く、両者の間には断絶があつて、訴えかける事は出来ないのである。この歌は、さきの二、の箇所であげた齊宮女御の歌によく似ていると思われる。「……思はぬ山にかからずもがな」「……思はぬ山にかかるわざせじ」と、女御の歌も亦、願望表現に終っていて、直接相手には訴えかけてはいなかった。この事は、女御の歌が直接の贈答歌として作られたのではなく、硯の中に入れていつしか相手の目にふれる事を意図したという成立事情にも照応している。しかし、女御の歌の上の句は、「身を浮雲になしつも」「春日霞になりにしが」である。女二宮の「のぼりにし峯の烟に立ちのぼり」という一筋の願望に較べ、これには屈折した心理があり、明らか



に相手の気を引いている。この点において、女御の歌は相手に訴えかける贈答歌であり、女二宮の歌は、訴えかける相手を見失った、そのくせ、恨みを含んだひとりごとの歌である。

⑥は、⑤と違って浮舟に贈る文中の歌であり、贈答という形式の中で詠まれている。それにもかかわらず、この歌も⑤同様浮舟に対する訴えかけとしてよまれているのではなく、強いて訴える相手を求めるとすれば、やはり自分を「思はぬ山」に迷わしめた人、大君であると思われる。薫は「法の山」を求めて大君を探りあてたにもかかわらず、大君を失って後は、求めた筈の「法の山」「大君」とは別の、「思はぬ山」「浮舟」に迷ってしまったのである。も早、「法の山」「大君」は余りにも遠くにある。大君にむかって訴えかける事など出来ない程、薫は「思はぬ山」にふみ迷っている。この歌には、贈答という形式をとりながらも、そのような迷いに迷った自分に、つくづくと思いをいたす、只一人の感慨のひびきがこもっている。

この歌は、「夢の浮橋」の最後の歌である。その事は、宇治の物語、ひいては、源氏物語の最後に位する歌という事になる。「思ふ山」「法の山」を目ざしながら、「思はぬ山」「愛慾の世界」に踏み迷う、人間の浅ましき、悲しさを最後に言って、作者は物語を終わろうとしているのであらうか。

①②から⑤⑥の歌が、恨みを含んだひとりごとの歌への方向を示しているのに対し、③④の、かげろふ日記の歌は、執念の歌である。

作者は、「思はぬ方」に行く兼家を恨む。憎みさえしている。作者の恨みと憎しみに比例して、二人の間の溝は、ますます深まる。にもか

わらず、作者は決して兼家を諦めるのではない。それどころか、作者は二人の間の断絶を、断絶がませばます程に、愈々もって認めようとはしないのである。だから、恨みの深さにつれて、執着の度合は一そう強くなってゆかざるを得ない。相手が「思はぬ方」「別の女」に向けば向くほどに、作者は「思はぬ方」「出家・地獄」を目指すことになるが、決して「思ふ方」への諦めによってではない。死ぬということと最終的に相手の気を引くために「思はぬ方」を持出すのである。そしてそのおどしは、相手を鼻白ませ、ますます「思はぬ方」へと追いやることになってしまふ他ない。ここにおいて「思はぬ方」は、相手が深まれば深まる程、自らにも深まり、自分が深まれば深まる程、相手にも深まる、という恐ろしい因果関係をあらわす言葉となってくる。これこそまさに贈答歌ではあるが、も早遊びの要素はどこにもない。恨みと執着がとぐるをまいてるのである。

これら①から⑥までの歌は、すべて女性の手になる歌である。⑥のみが、薫という男性の手になっているが、これとても紫武部という女性の手になっている。

単なる贈答の言葉としてあった「思はぬ方・山」を、ここまでの深い情念をもちこむ言葉に仕立て上げたのは、彼女たちの当時おかれていた境遇——家に閉ぢこもって男の訪れをじっと待つという——であらうか。男は、外来の学問の吸収に余念がなく、又宮廷社会の政争に明けくられていた。その時、じっと家に閉ぢこもって男の来訪をまち、自らの情念をみつめる事を余儀なくされた女たちは、社交の道具であった贈答歌を、もっと深く自らの情念をもちこむものに変化せしめていたのではな

かろうか。かげろふ日記の作者も、源氏物語の作者もともに、「思はぬ方・山」〔別の男・女〕の裏側に、結局は、愛慾のこの世―地獄―をみたのであるが、一人はその渦中にある人としてそれを把え、今一人は、一歩退いて、悔恨という形でそれを把えている。それは、日記作者と物語作者の差ともいい得よう。

## 六、贈答歌以後の「思はぬ方・山」

「思はぬ方」並びに「思はぬ山」は、贈答歌に全盛を極め、用例も多い。それは、男女の贈答の表現として適切であったからである。しかし、平安朝も半ばをすぎ、宮廷生活の地盤がくずれ、男女贈答の社交界がなくなると「思はぬ方」「思はぬ山」という言葉も消滅することになる。

しかし、贈答歌時代以後の歌集や物語の類をひもとく時、そこに数例ではあるが、「思はぬ方」「思はぬ山」の例を見出すことが出来る。しかもそれらの用法は、今までの贈答歌における用法とは異なっており、時代とともにうつり行く言葉の姿をうかがう事が出来るのである。

贈答歌以後にあらわれた「思はぬ方・山」は、(1)形の上では贈答の相手を手失っているにもかかわらず、内容の上ではなお贈答の相手にむかっているもの、とその反対に、(2)形の上でのみ、贈答の形式をとっているもの、の二つの方向がある。

### (1) 贈答の相手を欠いた贈答歌(述懐の歌)

贈答歌における「思はぬ方・山」が、現実の相手に対する訴えかけの言葉として用いられたのにひきかえ、これは、現実の相手を欠いている

にもかかわらず、なお、対象にむかっただけの訴えかけをその内容としているものである。

摂関政治の崩壊による宮廷サロンの衰微は男女贈答の社交界を消滅せしめ、それに代って贈答歌ではない、唯一人でうたう述懐の歌が登場した。そして、「思はぬ方・山」も亦、形の上では贈答の対象を見失って一人言の述懐の歌に変化するが、なお対象にむかっただけの恨み・執着をその内容とするのである。

弘安元年百首の歌奉りし時

前中納言為兼

忘れ行く人の契りはかりごもの思はぬ方になに乱れけむ

(新後撰集恋六)

は、つれない人のつらさに「思はぬ方」〔別の女〕に乱れた悔恨の歌であり、すでに源氏物語の女二宮や薫の歌(五ノ⑤⑥)の示した方向である。上の句「忘れ行く人の心はかりごもの」には、時が経てば忘れるのは人の心という悟りと諦めがあるが、下の句「思はぬ方に何乱れけむ」には、自らをして「思はぬ方」に乱れしめた相手への恨みがなお残っている。この歌は、形の上では贈答の相手がなく、一人称の述懐の歌の形をとっているが、そこにもられた思いは自己完結しているのではなく、訴えるべき相手にむかっているのである。

やがて、この種の歌は、訴えるべき対象を恋人という特定の相手から人生一般にひろげる。特定の相手に対する恋歌である事をやめて、人々は人生そのものに対する悔恨をうたうようになる。

有栖川といふ所に住みそめける頃詠み侍りける

栄仁親王

あらましの心の末はそれながら思はぬ山にすみ染の袖(新統古今集)

右の歌は、恋の挫折の落ち行く姿、とも受取れる歌であるが、「雉」の部に入っており、又親王その人の履歴から考えて、人生そのものの挫折と受取るべきかと思われる。栄仁親王は、北朝側の天子、崇光帝を父として生れ、皇位を継ぐべき人と定められていたが、そのような思い描いた行末のあらまし事はすべて空しく、遂にすみ染の袖に身をつつむ事になったのである。「あらましの心の末はそれながら」には、そのような自らの身の成行きを甘受しようとする悟りと諦めがほの見えるが、「思はぬ山にすみ染の袖」という下の句には、なお裁ち切れぬ恨みと執着がこもっている。次は、南朝側の「思はぬ山」である。

うかりける身を秋風にさそわれて思はぬ山の紅葉をぞみる（増鏡）

元弘元年八月、笠置の行在所における、後醍醐帝の御詠である。右の歌の「思はぬ山」には、もはや（別の女）の意も（出家）の意もなくなり、ただ文字そのままの（思イガケヌ山）の意に立ちかえっている。しかし、「思ふ山」とは違った「思はぬ山」の紅葉をみる事になったと、事志と違った世を恨めしのひびきがこもっており、人生そのものの挫折を歌っている。

そして、次の西行の歌は、右の後醍醐帝や栄仁親王の歌を、さかのぼる事凡そ一五〇年のものであるが、この歌では、も早対象への恨みさえ溶解し、自らの姿をみつめる態度に変化している。西行が、いち早く時代を直感したというべきであろうか。

降る雪にしをりし柴も埋もれて思はぬ山に冬ごもりする

（山家集「雪道を埋む」）

相手にむかっの恨みと執着を内容とした「思はぬ方・山」から、相

思はぬ方・思はぬ山

手にむかっの執着や恨みが消え失せる事は、この言葉が歌言葉としての機能を、も早失った事を意味すると思われる。対象への恨みと執着をもたず「思イガケヌ所」という何の裏の意もない文字通りの「思はぬ方・山」にかえって行く時、歌言葉としての意味も亦、この言葉から失われたのである。

## (2) 贈答の内容を欠いた贈答歌

さきの述懐の歌が、形の上ではもはや贈答歌ではなくなり、贈答の相手を欠き、しかも依然として相手にむかっの恨み、執着をその内容としているのに対して、ここで取上げる「思はぬ方・山」は、形の上ではなお贈答歌の趣きを残しつつ、しかも内容の上では、現実的な恨み、執着をもたないという状況のもとでの「思はぬ方・山」である。

従って、その「思はぬ方・山」は、現実の関心から離れた他人事としての（別の男・女）の意に変化するか、あるいはさらに、現実味を欠いたフィクションの面白さ乃至無責任な言葉の遊びに利用されるかである。前者は、散文的な態度を背景とし、後者は当然、連歌・俳諧にかけての一種の洒落な境地にかかわると思われる。

## A、散文的態度

堤中納言物語の標題の一つに、「思はぬ方にとまりする少将」というのがある。姉妹の許に通っていた二人の少将が、ある夜使いの者の手違いから、姉の許に通っていた少将は妹の許に、妹の少将は姉に、という話である。

「思はぬ方」とは、「思ふ人」（姉・妹）以外の「思はぬ方」（妹・姉）の意味であるが、この「思はぬ方」は、内容上では既に現実的な恨みと

執着の対象を欠いている。かつての「思はぬ方・山」が、相手にむかっている恨みや執着をその内容としていたのに比べると、この「思はぬ方」は、第三者が当事者である少将や姉妹の行為を示す言葉にすぎず、現実的な恨みや執着の対象を欠いているのである。さらに、同じ堤中納言物語の「はなだの女御」に、花すすきの御方を評する歌として、次の歌がある。

秋の野に乱れて招く花すすき思はむ方になびかざらめや

「秋の野に乱れて招く花すすき（の御方）」は、『思はむ方』（思う人）に靡かない事があるうか、靡く」。花すすきが、思はむ方に靡くのは余りにも当然すぎる事である。どうしてそれを反語で受とめて表現するのであろうか。又「花すすき」<sup>注16</sup>は、風に靡き易い浮気なものの代表でもある。

この物語は、侍女たちがより集って、お互に女主人の噂をしあう話であり、その中で、花すすき（その時喻えられた花の名）の御方は、その名の通り風に靡く浮気な御方であり、帝の寵うすく、為に別の男を通わす人として、侍女によって語られている。とすれば、「思はむ方」ではなくて、「思はぬ方」ではなからうか。<sup>注17</sup>花すすきは、「思はぬ方」（帝以外の別の男）に靡かない事があろうか、浮気な花すすきは、「思はぬ方」に靡くに違いありません。と解すれば、反語の意味も生きると思われる。

そして、この「思はぬ方」も亦、内容の上では、相手に対する執着・恨みをもっていない。相手以外の「別の男」に靡く「花すすき」の行動を「思はぬ方」に靡く、と表現したのであって、そこには当事者の相手を

に対する恨み・執着に代って、客観的な第三者の散文的な態度がある。このような散文的な態度は、他人の事に対してだけでなく、自分の事や自分の相手の事に対してさえも、及ぼされるようになる。

今昔物語巻三〇の第十一話「品賤しからぬ人、妻を去りて、後棲むものがたり」に、次のような歌がある。

年若き受領が、年来の妻を捨て、今めかしき妻に住み移った。男はある時、摂津の国の己が領地に赴き、難波辺りを逍遙していたところ「海松の房やかに生ひ出た蛤」をみつけた。これを早速に現在の妻にみせたく思い、従者をして届けさせたところ、従者は誤ってもとの妻の許に届けてしまった。一方、男は家に辿りつき、妻に例の蛤の贈り物の事を尋ねたところ、知らない、という。そこで男は、従者を呼び、もとの妻から蛤を取りかえさせるのであるが、その時のもとの妻の歌である。

蟹のつと思はぬ方にありしかばみるかいなくもかへしつるかな

この歌における「思はぬ方」は、もとの妻自身の事である。自分自身を、男にとっての「思ふ方」（今めかしき現在の妻）以外の「別の女」として、「思はぬ方」と表現したのである。堤中納言物語の二つの「思はぬ方」の例に示された散文的な態度は、ここに至って自分自身の事にまで及んだといえるかもしれない。

しかし、現実の贈答の相手にむかって、自分自身の事を、私はあなたにとつての「思はぬ方」でありますので、と言いかけるのは、歌として何とも奇妙な事といわなければならない。今昔巻三〇の十一話のこの歌には、恐らく今昔物語作者の第三者的な目が働いていて、それが、この歌をここに挿入せしめたと思われるのである。この第十一話は、伊勢物

語や大和物語に載る立田山説話の系統をひくものであるが、伊勢や大和が歌を中心とした歌物語であったのに比べ、今昔物語は話が中心であって、その点、伊勢や大和とは本質的に異なった態度で作られていると思われる。歌に中心をおく歌物語では、歌をやりとりする二人の世界が中心である。そしてそれは、前代までの贈答の世界である。ところが今昔物語になると、二人の贈答の世界は、単なる話の素材にすぎなくなる。

ここには何事も客観的に取扱う散文的な目が芽生えているのであり、その中にあるのは、作中人物の歌にさえ、第三者的な態度が介入すると思われる。自分の事を「思はぬ方」と詠んで相手への返歌としたこの第十一話の、もとの妻の歌には、実は、第三者である今昔物語作者の目が介入していると思われるのである。

ところで、このような態度は、それ以後の勅撰集の歌にもあらわれている。

① 弘安の百首の歌奉りける時

権中納言公雄

難波江やおなじ芦間をこぐ舟も思はぬ方やなほさはるらむ

(続千載集)

② 題しらず

左近中将実直母<sup>注19</sup>

人しれずほのめかしてもかひなきは思はぬ方の蟹の漁火

(新千載集)

①は、難波江を二そうの舟が漕ぎ進み、このまま進んで行けば、二人は相会える筈であるにもかかわらず、一そうが「思はぬ方」(別の男・女)に乗りあげるので、その事がさわりになって、舟は互いに相逢えぬ、という歌である。この場合、「思はぬ方」とは相手(男・女)の乗

思はぬ方・思はぬ山

りあげる方(別の女・男)の事であるが、「思はぬ方やなほさはるらむ」という表現には、も早、恨みや執着の対象は失われている。相手が「思はぬ方」に行くので自分は……という、あのかけるふ日記の作者の示した、訴えかけるべきはげしい執念の対象はなくなり、相手の行為は自分には関係のない他人の出来事のように客観的な態度で取扱われているのである。

②の歌は、相手にむかって人しれず秋波をおくってみても、自分が相手にとっての「思はぬ方」であってみれば、所詮は甲斐のないもの。蟹が漁火をいくら夜の海に明滅させてもそれが「思はぬ方」の光りである限り、結局は甲斐のないもの、という意である。そして、「思はぬ方」は、相手にとっての「思はぬ方」すなわち自分自身の事である。ここでは、自分の事をまるで他人のように、「思はぬ方」と表現しているのである。

①の歌は、(1)の例に示した前中納言為兼の歌と同じ、弘安の百首中のものであるが、一方があくまで当事者として自己の情念をみつめる主観的な詠みぶりであるに對し、この歌では、作者は当事者たることをやめて、第三者の客観的な立場に立っている。相手の行く「思はぬ方」(別の女)という、自分にとってのなまなましい現実を、一步退いて他人事をみるように眺めているのである。②の歌も同様であって、相手にとって自分は「思はぬ方」であるという、自分にとっての痛々しい現実を、他人を眺めるように表現しているのである。

(1)の述懐の歌が、恨みや執着の対象を、さらに広く人生そのものにおしひろげる事によって、人生における己が姿をみつめ、恨みや執着を乗り越えた、しずかな彼岸の境地にむかおうとしたのに對し、これらの歌

(2)のAの①②は、自分の事も相手の事もともに、他人の出来事と等しく客観的に取扱う散文的態度を獲得することによって、いわば遠心的に、現実の恨みや執着をとき放とうとしたのである。やがてこの態度からは、なまなましい現実をしばし離れてフィクションの遊びの世界に遊ぼうとする連歌↓俳諧の世界があらわれる。そしてそこでは「思はぬ方・山」は、現実味を欠いたフィクションの面白さ、乃至、無責任な言葉の遊びに利用されることになる。

# B、連歌↓俳諧

堀川院の御時、百首の歌奉りける時「時鳥」

基俊

一声のきかまほしきに時鳥思はぬ山にたびねをぞする（新拾遺集）

時鳥の声がききたいばかりに「思はぬ山」に昨夜は夜を明かした事だ。この歌は、「雉」の部に入っており、表向きは「時鳥」の歌として詠まれているが、その背後には、もう一つの意味があると思われる。男は、昨夜、「思はぬ山」〔別の女〕に旅寝をし、それを「一声のきかまほしきに時鳥思はぬ山に……」といったのけた。我ながらその弁解の面白さ、という処である。とすれば「一声のきかまほしきに」とは、実は、あの女の一声がききたいばかりに、という処であらう。

ここには已に、連歌↓俳諧にかけての、浮世をはなれた一種洒落な境地がほのみえていると思われる。問う女と答える男という贈答歌の趣きが、形の上では残っているが、それらは現実をはなれた風狂の世界の出来事なので、内容の上では、現実的な恨みや執着の対象はどこにも存在しないのである。そして、「思はぬ方・山」は、風狂の世界をつくり出す面白さに利用されているのである。

次は、連歌である。

## ① 山風や枝なき花を送るらむ

思はぬ方にちらす玉章<sup>註21</sup>

## ② 思はぬ方の宿をこそ問へ

花に行く心や我を忘るらむ

（菟玖波集卷一、救済法師）

①の「枝なき花」とは、枝をはなれて散る花の姿であり、山風に吹かれて、枝をはなれて散り舞う花の姿を、このように表現したのである。そして、風のまにまに枝という主をはなれて散る花の姿を、主を離れて風のまにまに浮かれ歩く人の姿にみたて、附句「思はぬ方にちらす玉章」が出来た。「思はぬ方に散らす玉章」とは、主とは違った「思はぬ方」〔別の女〕に玉章（艶書）を散らす、というのであり、前句同意の附合である。ここには、形の上の連想から、無責任にいくらでも言葉を連ねる、言葉の遊びの世界がある。このような世界では、「思はぬ方」は、相手に対する現実的な恨みや執着をもちよう筈もない。それは、言葉の遊びに利用されているのである。

②は、さきの基俊の歌と同意かと思われる。花に行く心が、我と我が心を忘れたらしい、「思はぬ方」の宿を訪う事になった。と、これは弁解する男の言いぐさで、それを聞いた女は、あなたの花〔女〕に行く心が、私の事を忘れてしまったらしい、それで「思はぬ方」〔別の女〕の宿をこそ問へ、という。

「我を忘る」には、「自分を忘れる」と、「（あなたは）私を忘れる」との二つの意味があり、男の言葉では前者の意に、女の言葉では後者の

意の「あなたは私を忘れる」の意に用いられていると思われる。男の弁解の言葉の方が、この連歌の表向きの意味であらうが、（自分を忘れる）事を、「我を忘る」と表現する用法は当時にはない<sup>註22</sup>ので、女の言い分、花に行くあなたの心は私の事などお忘れになったらしい、それで、花に浮かれて「思はぬ方」「別の女」をお訪ねになったのでしよう、という裏の意味の強いことがわかる。

菟玖波集に連歌としては破格の准勅撰の論旨が下ったのは、延文二年（一二五七）七月十一日の事である。これは、連歌が和歌を凌いで隆盛にあり、その流行が堂上人たちの所にまで及んだことを示すものと思われる。その後、連歌はますます盛んとなり、さらに俳諧への道が開かれるのであるが、それらは何れも、鎌倉から室町にかけての血なまぐさい戦乱の世を背景にうけての事である。しかし、連歌↓俳諧が、浮世をはなれたフィクションの遊び事から、さらに浮世即虚構の境地に達した時、も早そこには、「思はぬ方・山」という言葉は見出し得ないのである。贈答歌において、相手にむかっの現実的な恨み・執着をその言葉の内容とした「思はぬ方・山」は、結局は、贈答の世界を抜け切れず、連歌↓俳諧においては、せいぜいフィクションの世界における言葉の遊びにしか、その利用度がなかったのかもしれない。

以上、何の裏の意味をもたぬ「思はぬ方・山」が、「別の男・女」という裏の意味をとまって贈答歌に採用されるや、二重・四重のさまざまな用法を展開し、やがて贈答歌時代の終焉とともに、又もとの文字通りの「思はぬ方・山」に立ちかえる経路をたどったのである。そして、「

思はぬ方・思はぬ山

思はぬ方・山」という歌言葉の一つをたどる事によって、贈答歌の特質や和歌史の発展の一部をも具体的に跡づける事が出来たかと思われる。

贈答歌とは、宮廷サロンという男女贈答の特殊社会における特別の言葉の事であって、そこでは人々は、「あなたが好きだ」という直截な表現をさけ、「尾花が靡く」とか「舟がみなとにとまりする」といった自然現象その他の叙景に托す、贈答歌という特殊な表現によって、内側の情を述べるのである。従ってそこでは、二重の意味をおびた言葉が発達することになり、「思はぬ方・山」は、その一つである。

「思はぬ方」「思はぬ山」は、最初は、文字通りの「思イガケヌ方・山」の意に使用されていたが、贈答歌中に採用されることによって、「別の男・女」という裏の意をとまない、表裏二重の意味をもって使用されるようになった。そして、表裏の叙景と抒情（別の男・女）という関係のもとでの抒情の内容が新しい二重性（「別の男・女」+「出家」）をおび、さらにこの新しく派生した裏の意味（「出家」）をもとにして、それとは正反対の（「地獄或は浮世」）の意味が「思はぬ方・山」に転生することになるのである。このようにして、「思はぬ方・山」の二重性は、ますます複雑な形を示し、そうなることで、「思はぬ方・山」は、贈答歌にとつて、いよいよ利用度を高めて行くことになるのである。やがて、「思はぬ方・山」の二重性（或ハ四重性）が、男女贈答の遊びの用法から、自らの情念を歌いあげる用法へと転じた時、この歌言葉は、最高の意味を発揮するようになった。道綱母、和泉式部、紫式部等の女流の手になる和歌がそれで、そこでは「思はぬ方・山」は、不実な男に対する執念や恨みや悔恨を表現する言葉となっている。

しかし、男女贈答の遊びの用法から、自らの情念をうたい上げる用法へと転じたことは、実は、この歌言葉の消滅の兆しでもあった。表を叙景で装いながら、その実、裏側において、二重四重の意味をもつことは、訴えるべき相手にむかう贈答歌においてこそ意味あることと思われる。相手に訴える贈答歌であることをやめて、自らの情念をうたい上げる述懐の歌に至る時、もはや裏側に幾重もの意味をになう必要はないからである。事実、道綱母から紫式部にかけての時代は、贈答歌の地盤であった宮廷サロンの最盛期であるとともに、又その衰退を準備した時期でもあった。華やかな宮廷サロンは、道長の時代をもって終りをづけ、世はやがて、院政から源平の戦乱にかけての混乱の時代にむかうのである。そして、これら女流による「思はぬ方・山」の歌は、贈答歌のいたりついた最後のものと思われる。それは、贈答歌というわくの中にありながら、贈答歌のもっている遊びの要素をこえ、自らの心をみつめる態度を示しており、そこには次代の芽がみられるのである。

宮廷サロンが衰微し、現実の贈答の相手を見失った時、贈答歌は和歌史の舞台から退場する。そして「思はぬ方」「思はぬ山」という歌言葉も亦、姿を消すのである。現実の贈答の相手を見失った「思はぬ方・山」は、述懐の歌や洒脱した連歌↓俳諧のフィクションの世界に、その場所を見出そうとするが、これらの世界はともに、道筋こそ違え、この現世における現実的な恨みや執念をふっ切る方向にむかうものであった。相手にむかっている現実的な恨み・執着をその内容とした「思はぬ方・山」は、それらの述懐歌や連歌↓俳諧があるべき場所に至り得る過渡の道において、わずかに利用を得たにすぎず、結局は、その跡を絶つの

である。

現実的な恨みや執着をふっ切った「思はぬ方・山」は、も早、二重四重の裏の意味をもたない文字通りの「思はぬ方・山」であり、しかも、裏の意味をもたない文字通りの「思はぬ方・山」は、歌言葉ではなく、ただの言葉にすぎないからである。

注1、拙稿「『ぬれぎぬ』考」(京都府立大学々術報告、人文第十三号)参照。

注2、元永本、清輔本には、初句を「須磨の浦に」とある。

注3、卷三にのる354番の歌「繩の浦に塩やく烟夕されば行き過ぎかねて山に棚引く」も類歌といえるかもしれない。354番の歌は1246番のよりも後の作といわれている。(万葉集注釈)

注4、契沖自筆本「檜垣編集」にもある。(私家集研究第二輯)

注5、「思はぬ山」：貫之(八六八―九四五)、齊宮女御(九二九―九八五)、

実方(生年未詳、九九八歿)、重之(生年未詳、長保年中歿)

「思はぬ方」：景明(生歿未詳、円融・一条頃の人)、長能(生年未詳、一

〇一五頃歿)、赤染衛門(九六五生、歿年未詳)、大式三位(生歿未詳、平安中期頃)

注6、源氏物語、真木柱ノ巻の夕霧の歌、「よるべなみ風のさわがす舟人も思は

ぬ方に磯づたひせず」も同様の例である

注7、朝忠集には、「人に」と詞がきして「時しもあれ秋しも人のつらければ思はぬ山に入りぬべきかな」とある。

注8、「平安・鎌倉私家集」(岩波大系本)の注には、「二人の仲がわるくなるようになどとは思わない処にさえ、人の嘆きはあるもの故、ましてよくあつてほしいと思えば嘆きはひとしおである」とあるが、抽象的にすぎ、「男をうらみて」という詞がきにも照応しないと思われる。

注9、贈り主を兼家とする説はない。岩波の古典大系の「かげろふ日記」の注には「よその誰か」としている。

注10、この解に近いのは、「王朝文学叢書」の「かげろふ日記」の口訳である。



ここでは「真直に植えた呉竹が思はぬ方に傾くことよ。憂世に長らへば万事男心もこの通りよそに傾く」とある。その他、岩波の古典大系の注は、「思はぬ方」に（地獄）をみ、「国民文学全集」の口語訳は（浮世の成行き）をみている。さらに、堀辰雄氏の「かげろふ日記」では、「思はぬ方」に、（自分の行末の姿）をみている。「自分だって、何時その行末は……」である。かように「思はぬ方」の受取り方は、それぞれ異なっているが、それらに共通していることは、「思はぬ方」を二重の意味をもつ言葉としてとらえるのではなく、「思はぬ方」に傾いた呉竹を通して、そこに人生の教訓を比喩的にとらえている点である。

注11、日記には、この後に次の言葉がつづく。「今日は廿四日、雨のあし、いとどかにてあはれなり、夕つけて、いとめづらしき文あり、『いとをそろしきけしきにおちてなん日ごろへにける』などぞある、かへりごとなし、五月なを雨やまでつれづれと思はぬ山くとかやいふやうに物のおぼゆるままに、つきせぬ物は涙なりけり」。作者は兼家の使りに、かたくなに返事を拒否して、そのくせ心では、「思はぬ山く」「（別の女）+（出家）」と思っているのである。

注12、岩波の古典大系の注は、この第一の意味としている。国民文学全集・王朝文学叢書の口語文には「せめて風なりとも案外な方向に吹いてくれなかったら、この世の苦しみをあの世でもみそうです」と、あって、「思はぬ方」に肯定的な意味を与えている。

注13、湖月抄は「のぼりにし烟」を、御息所や柏木のいる死後の世界とし、それに対して「思はぬ方」は、（都に出ること）としている。岩波の古典大系の注は、「のぼりにし……」を御息所とし、それに対し「思はぬ方」は（夕霧の方）としている。但し、その両者を組合わせて、二重の意味にとっている注釈書はない。

注14、岩波古典大系本の注は「思はぬ山」を、「法の山」とは違った意外な（恋の山）としている。但し、さらにその裏の意味として、「大君」とは違った（浮舟）としている注釈書はない。

注15、堤中納言物語は、「逢坂越えぬ権中納言」が、天喜三年以前の約四年間に

思はぬ方・思はぬ山

おける成立という事を除けば、他の九篇の成立年代は、平安後期乃至鎌倉期という事しかわかっていない。それにしても、(1)の歌群より、時代を可なりさかのぼることになるうか。

注16、五頁参照。

注17、九頁参照。但し「思はぬ方……」の本文は見当たらない（『旧註集成、堤中納言物語』による）

注18、天永二年（一一一一）頃成る、といわれているので、これも、(1)の歌群よりさかのぼる時代である。

注19、左近中将実直は、今出川実直の事。応永三年（一三九四）歿。

注20、弘安元年（一二七八）

注21、宗祇初心抄に「前句同意の事」としてこの句を掲げ、「山風の技なき花を送るこそちらしたる体にて候へ。然ば前句ちると云字いたづらに成候」とある。「三冊子」にも引かれている。

注22「……心や我を忘る」と、心を擬人化して「忘る」の主語と考えれば解釈出来る。